「人魚」の実像考

―― 民間伝承の中の「妖精」の正体について ――

九頭見　和　夫

I. はじめに

その体形が人間と魚との合体といわれる想像上の動物である「人魚」は，古今東西を問わず様々な文献に登場する。例えば，19 世紀以降では，アンデルセンの童話「人魚姫」や太宰治の小説「人魚の海」（1944 年，『新釈諸国噺』所収）のような文学作品に最も多く認められるが，古い時代でも中国の漢の時代に出版された地理書『山海経』，さらには日本最古の歴史書『日本書紀』（720 年）や日本最古の国語辞書『倭名類聚鈔』（931 年―937 年）等にも「人魚」に関係する記述が認められる。

それでは，「人魚」とは一体いかなる生き物なのか。人々は長い人類の歴史の中で実在するいかなる動物をモデルに「人魚」という架空の生き物を創造したのか。試みに国語辞典の「人魚」の項目を参照すると，「(1) 一説に，ジュゴンやマナティなどの海獣がモデルになったといわれる。(2) さんしょううおの異名。」（小学館『国語大辞典』，昭和 50 年）[1] とある。比較的古い辞典にも「(1) 鯔魚の異名。トビハゼなるべしといふ。(2) 山椒魚の漢名。その面猴に似て，その声小児の鳴く如くなるよりいふと。(3) 儒艮の哺乳せる様の女人に似るより誤りなるべし。今なお俗に儒艮を人魚といふ。（平凡社『大辞典』，昭和 11 年）[2] と記されていて，ジュゴン，マナティ，山椒魚等の動物が，人々の「人魚」像形成に少なからず影響を与えたと推測される。なお「人魚に対する科学的見解」については，博物学者荒俣宏が『世界大博物図鑑』の中で詳細に解説しているので，その一部を引用する。

> ちなみに，西洋における人魚に対する科学的見解は時代によって変化している。〈存在の連鎖〉が信奉された 17 世紀ごろまでは，海中にも陸上と対応する生物相が存在するとの世界観から，海中の人間すなわち人魚の実在を当然視していた。現に，各地の博物館や個人所蔵の標本には人魚の死骸と称するものが多数残されている。ただしこれらはすべてサルと大型魚などを組み合わせた偽造品である。しかし 18 世紀にいたり，動物学の進展によって人魚の虚構性が検証され，リンネが初めて編んだ二名式動物分類学の体系からも落とされた。しかし，生きた人魚や人魚のミイラとよばれるものは 19 世紀を通じて依然各地で報告され，見世物にされた。この時期には日本製の人魚の剝製もかなり出まわっている。筆者も標本をひとつ見たが，サルとサメをつなぎ合わせた奇怪なつくりものだった。ただし一応は半人半魚の体をなし，人魚と判別できる。またアメリカの興行師 P.T. バーナムの一座が 1842 年に展示した〈フィジー人魚〉は一大センセーションをひきおこし，各地の博物館がこの偽造品を奪い合った。

人魚伝説は東洋にも広く流布する。中国の《山海経》に，人魚は 4 足をもち嬰児のような声を出すとあり，これが東洋の人魚の原形となった。いっぽう《本草綱目》は，〈西椋魚（せいりょうぎょ）〉と称する〈上半身は男，女の形のようで下半身は魚尾〉をした動物や〈牛魚〉をあげるのみで，人魚そのものはあげていない。しかし《山海経》の人魚がこれらと混同され，のちには牛魚がジュゴンと同定されたことから，通説として人魚＝ジュゴン観が成立したようだ。また人魚が捕れたとする記事が日本の《扶桑略記》《古今著聞集》などにも出ているが，

これらも本来は西楞魚などを指したものと思われる。

日本では人魚を〈ざんのいお〉ともよび，《和名抄》に〈魚身人面〉とある。《釈日本紀》に出てくる人魚もやはり魚身人面で，これらの記述によれば顔が人間に似た魚の意味になり，エイやサメの類を指したようだ。またなき声が小児のそれに似るという情報を加えればアシカ，アザラシの類とも考えられる。なお《北条五代記》は4足をもつと記しており，こちらは明らかに海獣類といえよう。上半身が人間という形での人魚像はおそらく西洋からの導入であり，江戸期以降に《和漢三才図会》や《六物新志》などの文献がこれを広めたらしい[3]。

また荒俣宏は，中国の「鮫人伝説」にも触れ，「中国の伝説によれば，鮫人は南海中にすみ，サメと人間の合いの子のような姿をしている」[4] と記している。

以下本論では，前述の国語辞典や荒俣宏の解説等を参考に，人魚の実像として最も注目されているジュゴンやマナティ等の海牛目の哺乳類，および『山海経』に登場するオオサンショウウオ等の両棲類を検討し，さらに一部研究者が注目するリュウグウノツカイ等のアカマンボウ目の魚類，そしてイルカやアザラシ等の哺乳類についても分析する。

II.　ジュゴン（儒艮）など（海牛目の哺乳類）

前述の国語辞典や『世界大博物図鑑』の解説にも記述されていたことであるが，「人魚」の実像として，ジュゴンやマナティなどの海牛目の動物を想定する文献は少なくない。例えば，明治時代から昭和時代にかけて活躍した民族学者南方熊楠（1867年―1941年）は，随筆「人魚の話」の中で儒艮と「人魚」の関係を紹介している。

儒艮の頭ほぼ人に似，かつその牝が一鰭をもって児を胸に抱き付け，他の一鰭で游（およ）ぎ，母子俱（とも）に頭を水上に出す。さて驚く時は，たちまち水に躍り込んで魚状の尾を顕わす。また子を愛することははなはだし。これらのことから，古ギリシャ人，またアラビア人などが儒艮を見て，人魚の話を生じただろうという[5]。

南方熊楠が紹介した，古ギリシャ人等が儒艮を「人魚」とみなした根拠，儒艮の頭が人間の頭に似ていること，および儒艮のメスが子供を胸に抱く姿が人間の母子に似ていること，については，荒俣宏も同様にジュゴン＝人魚説の根拠として紹介している事柄である。

雌の左右の胸びれの付け根には一対の乳房があり，子どもに乳を飲ませるときは，あたかも胸びれで子を抱いているかのようにみえる。これを見た船乗りたちが，ジュゴンを人間に近い存在と感じ，陸地の人びとにジュゴン＝人魚説を吹聴した，というのだ[6]。

しかし，ジュゴン＝人魚説の有力な根拠となっているジュゴンの頭の形については，人間の頭よりはむしろ牛の頭に似ていることから，生物学の分類でジュゴンは，「海牛目」に属し，中国名では「牛魚」と呼ばれている。またジュゴンは，一方の鰭で子供を抱き，もう一方の鰭で泳ぐが，少なくともこのような姿勢での授乳は，海洋生物学者清水誠によれば，「ジュゴンの一対の乳首は前肢のすぐ後ろの腹側にあり，そのような授乳法は不可能」[7] であるとのことである。

それではジュゴン＝人魚説はいかなる根拠に基づいて形成されたのか，その根拠を解明するためジュゴン等海牛目の動物についてその身体の構造や棲息地等を分析する。

1.　海牛目に属するジュゴンは，水棲の哺乳類で，「海牛目にはジュゴン科とマナティー科があり，前者にはジュゴン属（1属1種）が，後者にはマナティー属（1属3種）が属する。ジュゴン科には18C半ばまでステラ大海牛も含まれたが，人間によって絶滅させられてしまった」[8] のである。以下に「ジュゴン」の身体の構造および棲息地を紹介する。

ジュゴン　儒艮　dugong

南西諸島ではザン，ザンノイオ（サイの魚の

意）とも呼ぶ。カイギュウ目ジュゴン科の哺乳類。体は紡錘形で尾部先端に左右に広がる半月形の尾びれを有する海獣。後足は退化して見えず,前肢はひれ状であるが,中には5本の指骨がある。前肢（腕）の付け根の腹側に一対の乳頭があり，人魚伝説のイメージとなった動物といわれるが，その顔からはとても美人は浮かばない。犬歯は欠くが，第2門歯が長大できば状となっており，その成長線から年齢がわかる。寿命は約70年と思われる。臼歯は頬歯と称し，上下顎両側のレール状歯槽溝の中で，後部の歯が生成することによって，前方の歯は前へ押し出され歯槽溝から外れて脱落する。体長は出生時約1.3 mで，3 m以上に成長する。全身鉛灰色,腹部は淡桃色を帯びることもある。斑紋はない。西部太平洋およびインド洋の熱帯，亜熱帯の浅海域に分布し，海草類を食べている。北限は奄美大島。総数約3万頭であるが，分布域の西にいくほど少ない。肉が美味なため乱獲され減少した。オーストラリアを除き，CITES条約で稀少動物として保護されている。（平凡社『世界大百科事典』）[9]

一般に日本や中国でいう人魚の正体はジュゴンであったといわれ，西洋の人魚にもこの海獣をあてる説もある。紀元前には地中海にもジュゴンがいたといわれるにしても，これはかならずしも正説とはいいがたい。（『世界大博物図鑑』）[10]

体は頭は幅が広いが尾に至るに従ひ次第に細くなる。尾鰭は半月形を呈し，無根の臼歯が両顎に5対或は6対存在する。鼻孔は吻上に開き，前肢は鰭となり爪をもたない。頭蓋は非常に大きく，吻部は塊状を呈する。体は一面蒼灰色で,腹面は稍々淡い。海に棲息し,稀に淡水に入ることもある。海藻を嗜喰し，年1回1仔を産む。群游するが現時は乱獲の結果著しく減少し，台湾では之を天然記念物に指定し，保護している。油は採収する。頭蓋及び肋骨等はトレス海峡付近の土人は狩猟用になし，第一頸椎はパラウ島では，酋長の腕輪として世襲する。（三省堂『博物辞典』）[11]

ここで前述の引用等をもとに「ジュゴン」について整理する。

(1)　棲息地は,ペルシャ湾や紅海からアフリカ大陸の東海岸を中心とするインド洋の地域，および東南アジアとオーストラリアの北岸を中心とする南西太平洋地域で，総数は約3万頭。日本については奄美大島が北限とみられる。紀元前には地中海にもすんでいたという説がある。

(2)　熱帯や亜熱帯の海の浅瀬にすみ,海草類を食べる草食の哺乳類，その姿は牧草を食べる牛の姿に似ている。門歯から年齢が推定されるが，寿命は約70年といわれる。

(3)　身体の特徴。頭は非常に大きく，形は牛に似ている。体形は紡錘形で，体長は約3 m，イルカのように二つの左右に広がる半月形の尾びれを有し，色は鉛灰色である。雌の左右の胸びれ(前肢)の付け根には一対の乳房がある。胸びれには5本の指骨があるが，爪は有しない。臼歯（頬歯）は両顎に5対，あるいは6対存在し，生え替わりが独特である。つまり歯がすり減ってくると，新しい歯が後ろから生えてきて古い歯を前方に押し出し新しい歯といれかわる。それ故ジュゴンの歯は常に新しい。

(4)　ジュゴンの効用。縞もようの毛皮と美味な肉の故に乱獲されたが，現在はCITES条約で稀少動物として保護されている。しかし同じジュゴン科（ヒドロダマリス属）のステラーカイギュウは，乱獲により18世紀中頃（1768年）までに絶滅した。油は採収されて燈火等に用いられ，頭蓋骨等の骨類は狩猟用等に用いられる。

2.　つぎにジュゴンと同じ海牛目に属し，現在も棲息しているマナティについて考察する。

カイギュウ目マナティ科の哺乳類の総称。フロリダからカリブ海，南アメリカ北岸に分布するアメリカマナティー，アマゾン川のアマゾンマナティー，西アフリカの河川，とくにニジール川に多いアフリカマナティーの3種がある。海草やホテイアオイなどの水草を好

んで食べる。体は紡錘形で尾部先端に中央部が後方に張り出したスペード状の水平尾びれがある。…体長は種によって異なるが，アメリカマナティーでは出生時約1.5 m で，4 m 以上に成長する。(平凡社『世界大百科事典』)[12]

前述の引用等を参考にマナティについて整理すると，マナティがジュゴンと大きく異なる点は，その棲息地域である。マナティは，南北アメリカの大西洋沿岸と西アフリカの沿岸，およびアマゾン川流域に棲息している。ここで特に注目したいのは，ジュゴンが暖かい海の浅瀬にのみ棲息しているのに対し，マナティは淡水のアマゾン川にも棲息していることである。身体の特徴については，同じ海牛目ということでジュゴンとほとんど相違はないが，特に異なるのは尾びれの形で，ジュゴンの尾びれがイルカのように二つの左右に広がる半月形をしているのに対し，マナティの尾びれは丸いうちわの形をしている。

3.　海牛目に属する動物には，熱帯や亜熱帯の温暖な地域に現在も棲息しているジュゴンやマナティの他に，海牛目の中で唯一ベーリング海等の冷水域に棲息し乱獲により18世紀中頃までに絶滅したステラーカイギュウもいたのである。

ヒドロダマリス亜科は，ほかの海牛類がその起源以来すべて熱帯に分布したのに対し，唯一冷水域に適応した系統である。中新世前期の北アメリカ太平洋岸が起源と考えられ，それ以降の化石も比較的よくそろっている。ヒドロダマリス属 (Hydrodamalis) に至って頬歯が完全に消失した。ステラーカイギュウはこの系統の最後の生き残りであったが，1768年頃までに人為的に絶滅させられたことは有名。(『古世物学事典』)[13]

ステラーカイギュウは，かつて北太平洋に生息していた大型の草食海生哺乳類。体長は約8 m もあり，近縁種ジュゴンの3倍にも達する。発見者シュテラーは，ベーリング Vitus Jonassen Bering（1681年―1741年）のカムチャッカ探検に参加した博物学者。1741年11月，探検船が無人島（今のベーリング島）の海岸に座礁，シュテラーを含む乗員たちは当地の沿岸にすんでいたこの大きなカイギュウの肉と脂で飢えをしのいだという。ちなみにベーリングは壊血病で死亡した。シュテラーはその後，探検のあいだにみつけた新種の動物たちの記録をまとめ，死後には論文集が出版された。そのなかで彼はこのカイギュウについて，〈ウシのように群れをなし〉〈ウマのように鼻息荒く新鮮な空気を吸う〉と述べるなど，早くもウシ，ウマといった有蹄類との比較を行っている。(『世界大博物図鑑』)[14]

前述の引用で特に注目すべきことは，ベーリング探検隊に同行しステラーカイギュウを発見したドイツの動物学者シュテラー G.W. Steller（1709年―1746年）が，当時すでにステラーカイギュウと牛や馬といった有蹄類との近縁性に着目していたことである。なぜなら20世紀に至るまでジュゴン等の海牛目の動物たちは，動物学者たちによってクジラの仲間とみなされていたからである。なお千数百年前に棲息していたステラーカイギュウの祖先であるダイカイギュウ（ドシシーレン）の化石が，1978年（昭和53年）に山形県の最上川流域，1980年（昭和55年）に福島県高郷村の阿賀川流域，そして2006年（平成18年）には新潟県長岡市など日本各地で発見されていることから，ステラーカイギュウと日本列島との密接な関係が推測され，日本における「人魚」像の解明に重要なポイントとなると思われる。

以上ここまでは主として長い人類の歴史の中で人々から想像上の動物「人魚」に擬せられてきた動物たち，その中でも特に可能性が高いとみなされてきた海牛目に属するジュゴン，マナティ，ステラーカイギュウについて，その棲息地等を中心に分析してきた。以下においては，これらの分析を拠り所に，ジュゴン＝人魚説を解明するため，ジュゴン等の海牛目に属する動物たちと，文学作品等古来から伝わる様々な文献に登場した「人魚」とを比較しその関連について分析する。主として取り上げるのは，ヨーロッパではアンデルセンの

童話「人魚姫」(1837 年),東洋では中国の漢の時代の地理書『山海経』,日本では井原西鶴の浮世草子「命とらるる人魚の海」(『武道伝来記』所収,1687 年)と谷崎潤一郎の小説『人魚の嘆き』(1917 年)である。

アンデルセンの「人魚姫」やアイルランドの妖精伝説に登場する人魚「メロウ」等ヨーロッパの文献に認められる「人魚」については,その棲息地から判断する限り,ジュゴン等海牛目の動物がモデルであると結論づけることは困難である。例えばフロリダ海域に棲息するマナティがメキシコ湾流(暖流)にのってアイルランドやデンマークの沿岸に流れ着いた可能性も否定できないからである。しかし前述の『世界大博物図鑑』によると,ジュゴンがかつて地中海にすんでいたという説もあることから,ヨーロッパの「人魚」をジュゴンとみなせないこともない。少なくとも「人魚姫」の挿絵を書いた画家(V.ペデルセン)[15]は,ジュゴンの特徴であるイルカのような二つに分かれた尾びれを持つ「人魚」を書いていることから,この画家はジュゴンを想定して「人魚」像を描いたものと推測される。つぎに人魚姫のすむお城についても,アンデルセンは,「海の一ばん深いところ」,つまり「水の上までとどくためには,教会の塔をたくさんつみかさねねばならない」[16]海の底にあると表現し,暖かい海の浅瀬にすむジュゴンやマナティの場合とは異なる。寿命についても,「人魚姫」の寿命は 300 年,死ぬと海のあわとなって消え,人間のように「死ぬことのないたましい」は持っていない。一方ジュゴンの寿命は約 70 年,「死ぬことのないたましい」の保持については定かでない。

つぎに中国の地理書『山海経』に登場する「人魚」の実像について考察する。全体が 18 巻から構成されている『山海経』の中で特に「人魚」等魚身人面の動物の記述が多く認められるのは,「五蔵山経」,とりわけ「中山経」と「海内四経」で,この魚身人面の動物,つまり人面魚につけられた名称は,人魚,赤鱙(せきじゅ),氐人(ていじん),陵魚(りょうぎょ),鯥魚(ていぎょ)の 5 つである。「人魚」の棲息地は,「北山経」,「西山経」,「中山経」の場合でもすべて川の中で,体形は挿画から判断すると,足,または足に類似したものがついていることから,ジュゴン等海牛目以外の動物と推測される。それ故『山海経』に登場する人面魚身の「人魚」については,他の動物との関連で後に分析する。

それでは井原西鶴の浮世草子「命とらるる人魚の海」等に登場する日本の「人魚」のモデルは何なのか。日本の近海に棲息した海牛目に属する動物は,ジュゴン科のジュゴンとステラーカイギュウである。しかし奄美大島以南に棲息するジュゴンが日本列島の沿岸に出現するためには,対馬海流(暖流)にのって日本海を北上するか,日本海流(黒潮)にのって太平洋を北上するかである。一方ベーリング海に棲息したステラーカイギュウが日本列島の沿岸に出現するためには,リマン寒流にのって間宮海峡をとおり日本海を南下するか,千島海流(親潮)にのって太平洋を南下するかである。なお藤沢衛彦がまとめた日本における人魚出現の記録『日本伝説研究二』によれば[17],最後の人魚出現の記録は江戸時代の宝暦 8 年(1758 年)である。この 10 年後の 1768 年にステラーカイギュウは乱獲により絶滅する。このステラーカイギュウ絶滅と人魚出現の記録との関係はどのように解釈すべきなのか。以上の疑問を解明するため,ここで井原西鶴の「命とらるる人魚の海」を取り上げ,そこに登場する「人魚」像を分析する。

> 奥の海には,目なれぬ怪魚のあがる事,其例おほし。「後深草院宝治元年三月廿日に,津軽の大浦といふ所へ,人魚はじめて流れ寄,其形ちは,かしら,くれなゐの鶏冠ありて,面は美女のごとし。四足,るりをのべて,鱗に金色のひかり,身にかほりふかく,声は,雲雀笛のしづかなる音せし」と,世のためしに語り伝へり[18]。

ここに引用したのは作品の冒頭部分であるが,この部分を参考に西鶴の描く「人魚」像を整理すると,以下の 2 点に集約することができる。

(1) 人魚が出現した時の状況。場所は奥の海(津軽の大浦),時期は宝治元年(1247 年)3 月 20 日。

これは，藤沢衛彦がまとめた人魚出現の記録の14番目に該当する。

(2)　人魚の容姿の特徴。顔は美女のように美しくて体臭もあり，声は雲雀の鳴き声に似ている。紅の鶏冠，瑠璃色の四足，金色の鱗も看過することができない。

まず出現した場所についてであるが，前述の藤沢衛彦作成の人魚出現の記録23件中，陸奥外ケ浜（1189年と1248年），秋田浦（1213年）も含めると津軽浦（1203年，1247年に2回，1688年，1758年に2回）の近辺だけで合計9件にものぼる。蒲原有明の物語詩「人魚の海」（『有明集』所収。1908年）に登場する人魚の出現場所も「奥の浦」とあり，正確な場所は定かでないが，井原西鶴の「命とらるる人魚の海」の場合同様北の海である。寒流にのってステラーカイギュウが南下したのか，あるいは暖流にのってジュゴンが北上したのか，津軽浦は微妙な位置にある。

つぎに「人魚」の容姿についてであるが，「命とらるる人魚の海」の挿絵に描かれた人魚をみると，他の日本の文学作品に登場する「人魚」の場合と同様，ジュゴン科の動物の特徴であるイルカのように二つに分かれた尾びれをもつ「人魚」が描写されている。しかし「四足」（二本の手と二本の胸びれ）や「くれなゐの鶏冠」も描かれており，この身体の特徴はジュゴン科の動物とは明らかに異なっている。

以上人魚の出現場所や挿絵も含めた人魚の容姿からは，井原西鶴の「命とらるる人魚の海」に出現する人魚のモデルがジュゴンなのか，ステラーカイギュウなのか判断は困難である。しかし1758年の津軽野内海への出現を最後に，少なくともステラーカイギュウが絶滅した1768年以降には日本の文献から「人魚出現」の記録が完全に消えたこと，およびジュゴンはステラーカイギュウ絶滅後現在に至るまで奄美大島以南に棲息していて，1758年以降もジュゴンは日本近海に出現することが可能であることを考慮すると，少なくとも井原西鶴の「命とらるる人魚の海」に登場する「人魚」のモデルは，かりにモデルをジュゴン科の動物に限定した場合には，ジュゴンよりはむしろステラーカイギュウの可能性のほうが高いと推測される。

谷崎潤一郎の小説「人魚の嘆き」（1917年）に登場する「人魚」も魅力的である。放蕩の限りをつくし，酒と女にあきあきしていた支那の貴公子の心をとらえた「人魚」は，地中海がふるさとで南洋の島国に迷って来た所を人間に捕獲されたのである。西洋では人魚は珍しくなく，ライン川の川上には昔から人魚が棲んでいて，人魚は他の生物，例えば海蛇等に変身する神通力を持っている。容貌は「神に近い美しさ」があり，人間と同じように涙を流す。この「人魚」のモデルは，棲息地から判断すると，ジュゴンではないかと思われる。

III.　オオサンショウウオ（有尾目の両棲類）

中国古代の地理書『山海経』に，人面魚身の「人魚」が川の中に棲息していることが書かれていること，およびこの動物は棲息地や体形等から判断すると，ジュゴン等の海牛目の動物とは異なるのではないかということをすでに述べたが，それではこの「人魚」と呼ばれる生き物の正体は何なのか。「人魚」に関係する記述は，「五蔵山経」の「西山経」，「北山経」，「中山経」に認められるが，その中から特に「北山経」の「人魚」に関係する部分を引用する。

> 又東北二百里，曰龍候之山，無草木，多金玉。決決之水出焉［音訣］，而東流注于河。其中多人魚。其状如鯥魚四足，其音如嬰児［鯥見中山経。或曰，人魚即鯢也。似鮎而四足，声如小児嗁。今亦呼鮎為鯥。音蹏］。食之無癡疾。（「北山経」）[19]

「人魚」について整理する。

(1)「人魚」の棲息地については，引用した「北山経」の場合だけでなく，「西山経」や「中山経」の場合でもすべて川の中である。

(2)「人魚」の容姿の特徴は，鯥魚のように足が4本あり，その声は赤子が泣く時のようである。別の人によれば，「人魚」とは，「鯢」（サンショウウオ）のことで，「鮎」（ナマズ）に似ていて足が4本

あって，声は赤子が泣く時のようであるとのことである。

(3)「人魚」の効能については，「人魚」を食べると痴呆症にならない，つまりボケることなく長生きできる。かりに「人魚」が実際にはサンショウウオのことであるとすると，本草学の面からサンショウウオが古来精力剤として重宝されてきたことも納得できるのである。なお「人魚」の解説の中に登場した「鯨魚」についてであるが，本書の訳者前野直彬の「注」には，「サンショウウオ」とあるが，荒俣宏は，「トビハゼ」としている[20]。

さらに中国の「人魚」像を解明するため，中国で「鯢魚」と呼ばれる「オオサンショウウオ」の実態について博物学の観点から分析する。

> 中国には，オオサンショウウオにごく近縁のチュウゴクオオサンショウウオがすむ。原地で鯢魚と呼ばれるのがこれである。一般に日本産のものよりやや小型で，1 m を超えることはまれである。中国の古い名物学書《爾雅》に注をつけた郭璞（かくはく）は鯢について，前肢は猴（サル），後肢は狗（イヌ）に似ていると述べている。大きなものは 8―9 尺になるとしている点で，おおむねチュウゴクオオサンショウウオの特徴をとらえている[21]。

これは，『世界大博物図鑑』のオオサンショウウオの体形についての解説であるが，同書はオオサンショウウオの鳴き声についても触れている。

> オオサンショウウオを〈嬰児のように泣く〉とする伝承は中国起源であるにちがいない。《蜀志》が述べている鮒魚がチュウゴクオオサンショウウオであるとすれば，この〈嬰児の泣き声〉は河童の原型といわれる河伯（かはく）と関係があるようだ[22]。

このオオサンショウウオの鳴き声については，日本から帰国する際にオオサンショウウオのつがいをオランダに持ち帰ったシーボルトによってヨーロッパに伝えられ，例えばチェコの作家カレル・チャペックの小説『山椒魚戦争』（1936 年）等に影響を与えている。なおオオサンショウウオをモデルとする『山海経』の「人魚」像は，その後日本にも伝えられ，例えば源順が編纂した日本最古の国語辞書『倭名類聚鈔』（931 年―937 年）等でとりあげられている。

> 人魚　兼名苑云，人魚一名鯪魚，上音陵，魚身人面者也。山海経注云，聲如小児啼，故名之[23]。

ここでオオサンショウウオの発する体臭について触れてみたい。「山椒のような香りがするということについては，大山椒魚を捕らえたり，つついたりすると，背面皮膚に多数あるいぼ状突起から白い粘液を出し，それが山椒のような独特の刺激臭があるためだという。」[24]　このオオサンショウウオの香りと井原西鶴が「人魚」の描写で，「身にかほりふかく」と表現したこととは，関わりがあるのか，定かでない。『山海経』に登場する「人魚」については，なぜか体臭については触れられていないのである。この「人魚」の体臭については，『山海経』のみならず，「人魚」についての記述がある世界中の文献をみても，「人魚」の体臭についてふれた井原西鶴の「命とらるる人魚の海」の方がむしろ例外的な存在なのであろう。

IV.　リュウグウノツカイ（アカマンボウ目の魚類）

本論で紹介した事典等で明白なように，「人魚」の正体をジュゴン等海牛目の哺乳類とみなす研究者は少なくないが，「人魚」の出現記録や特に「人魚」の身体の特徴を根拠に，「人魚」の正体をジュゴンとすることに否定的な魚類学者もいる。例えば動物学者安富和男が紹介する高島春雄もその一人である。

> 高島先生は，その著書の中で，「日本人が本物のジュゴンを見るようになったのは明治以来であり，それよりもずっと前から人魚の伝説はあって，西紀五三七年推古天皇の御宇に既に出現したとの記録を有するから，ジュゴンを人魚の本体とするのは断じて妥当ではない」と怒っておられる[25]。

高島春雄によれば，日本でジュゴンが捕獲されたのは，明治 40 年に宮崎県油津，大正 14 年に鹿

児島県阿久根,昭和14年に愛知県知多郡野間村の三例だけであるという。かりに「人魚」のモデルがジュゴン等の海牛目の動物でないとすると，それでは他のどの動物なのかということになる。例えば,「人魚」が登場する日本の様々な文献から「人魚」の特徴，特に「人魚」の身体的な特徴を抽出し，「人魚」のモデルがアカマンボウ目の魚類リュウグウノツカイであることを主張したのが,「魚類の生活史研究の第一人者」といわれた九州大学名誉教授内田恵太郎（1896年―1982年）と魚類学を専門とする元新潟大学理学部臨海実験所所長本間義治である。

内田恵太郎は，橘成季の『古今著聞集』（1254年），菊岡沾凉の『諸国里人談』（1743年），松浦静山の『甲子夜話』（1821年―1841年），大槻玄澤の『六物新志』（1786年）等を参考に日本の沿岸に出現したとされる「人魚」の身体的特徴を中心に分析し，日本の「人魚」をリュウグウノツカイと結論づける。

> 日本の沿岸に現われたという人魚には見逃すことのできない重要な共通点がある。頭に赤い長い髪があり，肌は白く，体は魚の形で長いということである。見られた場所も，九州北部・日本海沿岸・東北地方などに多い。日本でも人魚の正体は海獣のジュゴンだという説が一般に広まっているが，日本沿岸で見られた人魚は，上記のように，ジュゴンとは全く似ていないし，分布も違う。…硬骨魚の中に分類学上「紐帯類」（Taeniosomi）といわれる1群の魚がある。類の名の示すようにリボン状の長い体をした特殊な形の魚である。その1種に学名レガレクス Regalecus という魚がある。英語名をリボン・フィッシュ ribbon-fish またはオア・フィッシュoar-fish という。体は非常に長くて10mにもなり，全形がリボン状で全体銀白色に光る。頭の形は普通の魚と違い，人間かサルの横顔の感じがしないでもない。頭の頂上からうしろに5―6本の非常に長い鰭のすじがあり，根もと半分は膜でつながっているが，これが赤サンゴのように赤く，長い髪のようになびき，その後方につづく背鰭も赤い。頭の下にある1対の腹鰭は左右ただ1本ずつの長いすじで，これも薄赤い。銀白色の皮膚には鱗がなくて，小さいイボのようなぽつぽつがあり，これが腹側では多少逆とげのような感じを与える。この奇妙な魚はときどき海面に現われ，頭上の鰭すじをトサカのように立てる。荒天のあとでは海岸に打ちあげられることがあり，小さいのは網にも入るが，珍しいので，新聞にも名の知れぬ珍魚として報道される。この魚は北大西洋・北太平洋に分布し，日本沿岸でもときに獲れるが，1―2mのものが多い。日本沿岸の種類はリュウグウノツカイ Regalecus russelli といい，朝鮮海峡から日本海沿岸にときどき現われる。太平洋側にはまれである。このリュウグウノツカイの特徴が，本草綱目のシン蜃，日本沿岸で実見された人魚によく合うので，私はこれが日本の人魚の正体であろうと考えているのである。とにかく日本の人魚はジュゴンではない[26]。

内田恵太郎による「人魚」の身体的特徴についての指摘は自然科学者らしく明快である。例えば，内田が参観しなかった井原西鶴の「命とらるる人魚の海」に登場する「人魚」も，「かしら，くれなゐの鶏冠ありて」と表現されている。それから内田のいうリュウグウノツカイが珍魚であることについてであるが，2002年2月6日付の「朝日新聞」は，大きなカラー写真で，佐賀県唐津市の離島・神集島に体長4.43メートルのリュウグウノツカイが打ち上げられたことを報じていることからもわかるのである。

ところで，このことは内田も指摘していないことであるが，特に哺乳類のメスの特徴である乳房に注目してみると，なぜか井原西鶴の「命とらるる人魚の海」をはじめ江戸時代までの日本の文献に登場する「人魚」には，乳房が描写されているものが，J. ヨンストンの『動物図譜』（1660年）を紹介した大槻玄澤の『六物新志』以外ほとんどなく，このことも哺乳類のジュゴンを「人魚」のモ

デルとみなすことにためらいを感じる理由の一つである。なお1663年に4代将軍徳川家綱に献上されたJ. ヨンストンの『動物図譜』をはじめ外国の文献に登場する「人魚」のメスMermaidには乳房がはっきりと描かれている。井原西鶴の「命とらるる人魚の海」を翻案した太宰治の「人魚の海」(1945年)には，「胸に南天の赤き実を二つ並べ附けたるが如き乳あり」[27]と西鶴が描写しなかった乳房が描写されているが，このことは明治時代以降アンデルセンの「人魚姫」等ヨーロッパ文学の影響を受けて，作家が「人魚」のモデルをジュゴン等の哺乳類と考えるようになったからではないかと推測される。

内田恵太郎の「人魚」のモデルをリュウグウノツカイとする説を積極的に支持するのが本間義治である。

> リュウグウノツカイは，中国で鶏冠刀魚という至妙な名がついている通り，細長く（10 mに達する種もある）て側扁した銀白色のリボンのような体をもち，頭頂に始まる赤色の背鰭が高くて，尾端まで続いている。ことに頭頂の5―6本の鰭状が長くて，上の方は遊離してたてがみのようになびいている。頭は角張り，口は大きく開いて前方へ突出でき，眼が大きいので，横顔が人や猿のように見えないこともない。腹鰭も長い鞭状のものに変り，先端がふくらんでいる。尾鰭は小さく，体に鱗はないが，腹方にいぼ状の突起が数列並んでいる。Ribbon-fish, oar-fish, Riemenfischなどの欧米名もよくその姿態を現しているが，新潟県柏崎の方言“しらたぎ”ことに富山湾の方言“花魁（おいらん）”は妙である。骨格系は石灰化が弱く，筋肉は線維分が少なくて，ミオビロビンをもたず，白く，結合組織に膠質が発達して全体が軟かい。食べても，美味かろう筈がない。しかし，以上述べ来たった諸点が，いかに日本の伝説・説話・実見談に出てくる人魚と似ているかお分かり頂けたと思う[28]。

リュウグウノツカイの呼び名として，本間によれば，富山湾の方言で「花魁」とあるが，古来男性を誘惑する存在とされてきた「人魚」にはふさわしい呼び名と思われる。本間の説明で気になるのは，リュウグウノツカイの味が美味ではないことである。例えば，人魚の肉が美味なためたくさん食べた娘が800年長生きしたという北陸を中心に伝わる「八百比丘尼伝説」や『古今著聞集』の「うら人みなきりくひてけり。されどもあへてことなし。そのあぢはひことによかりけるとぞ。人魚といふなるは，これていの物なるにや。」[29]の個所との整合性はどうなるのか，リュウグウノツカイを「人魚」のモデルとみなすことにも，課題が残るのである。

V．その他の動物―イルカ，アザラシなど（哺乳類）

様々な文献の中には，イルカ（クジラ目）やアザラシ（食肉目）等の海に棲む哺乳類を「人魚」のモデルとして扱っているものがある。中でもイルカは，体形がジュゴン等海牛目の哺乳類と同じ紡錘形で，尾びれの形もジュゴンに類似していること，浅海性で大西洋，インド洋，および日本近海でもしばしば目撃されていること，さらに脳のサイズが大きく大変利口な動物であることなどによって，古来人間に近い存在，「人魚」とみなされてきたと推測される。例えば島田荘司のミステリー小説『人魚兵器』(2005年)では，人間と動物の細胞を混ぜ合わせて混合種をつくり，それを勇猛な兵士に仕立て上げようとした，ナチスの軍事秘密研究所の実験において唯一成功した人間とイルカとの混合種の「人魚」が，題材にされている。しかしイルカを「人魚」のモデルとすることで問題となる点が2点ある。イルカは群れをなして遊泳してエサとなる魚をとること，およびイルカの肉は生臭いため中国や日本では食用にされることはあまりないことである[30]。すなわち井原西鶴の「命とらるる人魚の海」等の小説をはじめ，日本の文献に登場する「人魚」は決して群れをなして出現することはなく，また『古今著聞集』に登場する「人魚」など「人魚」の肉は美味というのが通説となっていることとの整合性である。

2002年の夏から冬にかけ，東京の多摩川や横浜市の鶴見川等を泳ぎ回り，「タマちゃん」の愛称で人々の人気を博したアゴヒゲアザラシの存在については新聞等で頻繁に報道されたため多くの人々の記憶に残っていると思われるが，ふだん北極海や ベーリング海に棲息し，サハリンを南限としているアザラシがどのようにして東京湾に出現したのであろうか。このことは，おそらくアザラシが餌を求めるうちに間違って千島海流(親潮)にのって南下したものと推測されるが，13世紀後半の鎌倉時代にも秋田県の海岸にアザラシとみられる四本足の「人魚」が出現し，その様子を描写した木札が1999年5月25日に秋田県の「洲崎遺跡」から発見されている。以下は木札発見を報じた「福島民報」の記事である。

> 秋田県埋蔵文化財センターは二十五日，同県井川町にある中世の港町跡の洲崎遺跡で，空想上の生物である人魚を描いた杉板が出土したと発表した。鎌倉時代の人魚を供養した札とみられ同センターは「人魚の姿を描いた絵の出土は全国でも例がない」としている。江戸時代の文献などによると，鎌倉時代には，人魚の出現は戦争や疫病など不吉な兆しとされ，漂着すると，鎌倉幕府に報告。地方と中央が連動して祈とうしたという。「人魚の動物民俗誌」の著書がある名古屋市の市史専門員吉岡郁夫さんは「人魚の出現記録は東北地方に多く，四本足の人魚はアザラシなどを誤認した可能性が高い」とコメントしている。同センターによると，杉板は洲崎遺跡の，井戸の外枠と内枠の間に横向きにはめ込まれており，長さ約80センチ，幅14.5センチ，厚さ0.5センチ。片面の上半分に，僧りょと人魚が上下に描かれている[31]。

「人魚」の絵としては日本で最古と推測されるこの絵には，2本の腕と2本の脚を持つ，人間の顔をした魚が描写されている。なおアザラシについては，江戸時代（1833年，愛知県熱田沖）にも出現し見世物として人々の人気を博したことが，名古屋市博物館所蔵の『又兵衛新之田前新開ニ入込候海獣ノ記』にアザラシの絵とともに記されている[32]。

VI. おわりに

想像上の動物といわれる「人魚」の実像を解明するため，ジュゴン，ステラーカイギュウ，マナティ等の海牛目の哺乳類を中心に，オオサンショウウオ等の両棲類，一部の魚類学者が主張するリュウグウノツカイ等の魚類，さらにはイルカやアザラシ等の哺乳類について，井原西鶴の浮世草子「命とらるる人魚の海」等の「人魚」が登場する様々な文献と関連させて分析を行ってきたが，明快な結論に達することはできなかった。

特に「人魚」の実像として最有力視されているジュゴンやステラーカイギュウ等の海牛目の動物については，熱帯や亜熱帯に棲息しているジュゴンもベーリング海に棲息していたステラーカイギュウも日本近海には棲息していないため海流にでもうまくのらない限り日本近海に出現することが困難なこと，およびこのこと以上に体形が文献に描かれた「人魚」像に似ていないことが問題である。例えば人間の女性のように子供を抱いて授乳することが困難と推測される乳房の位置，「かしら，くれなゐの鶏冠」(「命とらるる人魚の海」)がないことなどである。

オオサンショウウオについては，日本でも関西地方を中心に棲息しているが，オオサンショウウオを「人魚」とみなす考え方は，『山海経』をはじめとする中国の影響で日本固有のものではない。なおオオサンショウウオの棲息地が川であることも日本の「人魚」像とは関係がうすいと思われるが，サンショウウオが古来強精剤として珍重されたことから八百比丘尼伝説との関係を考えられないこともない。

体形の点で「人魚」の実像として有力なのが，リュウグウノツカイである。井原西鶴の「命とらるる人魚の海」に描かれた「くれなゐの鶏冠」はリュウグウノツカイの身体の特徴で，北太平洋を棲息地とするこの魚が，朝鮮海峡から日本海沿岸にときどき出現することも「人魚」の条件にあっ

ている。問題はこの魚の肉が美味でないことである。『古今著聞集』をはじめ様々な文献に登場する「人魚」は美味であると記されている。

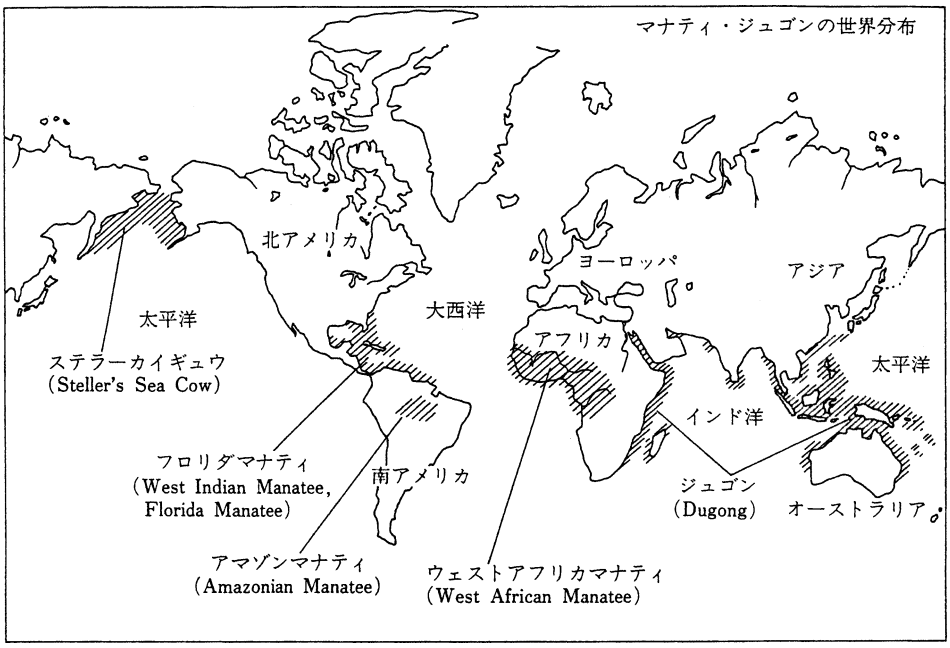
イルカやアザラシ等の哺乳類も「人魚」の実像の一つの例と考えられている。特にイルカは体形がジュゴンに似ていて利口な動物であることから人間に近い存在「人魚」とみなせないこともないが，イルカは群をなして行動すること，肉が美味でないことなどが問題である。またアザラシについては，現在でも日本近海に姿をみせ，秋田県井川町の洲崎遺跡から鎌倉時代に出現したアザラシとみられる「人魚」を描いた杉板が出土し，人間に身近な存在であるからである。

以上「人魚」の実像について結論を見いだすことはできなかったが，「人魚」は想像上の動物，明らかにならない方が夢があっていいのかもしれないのである。

(2009 年 9 月 28 日受理)

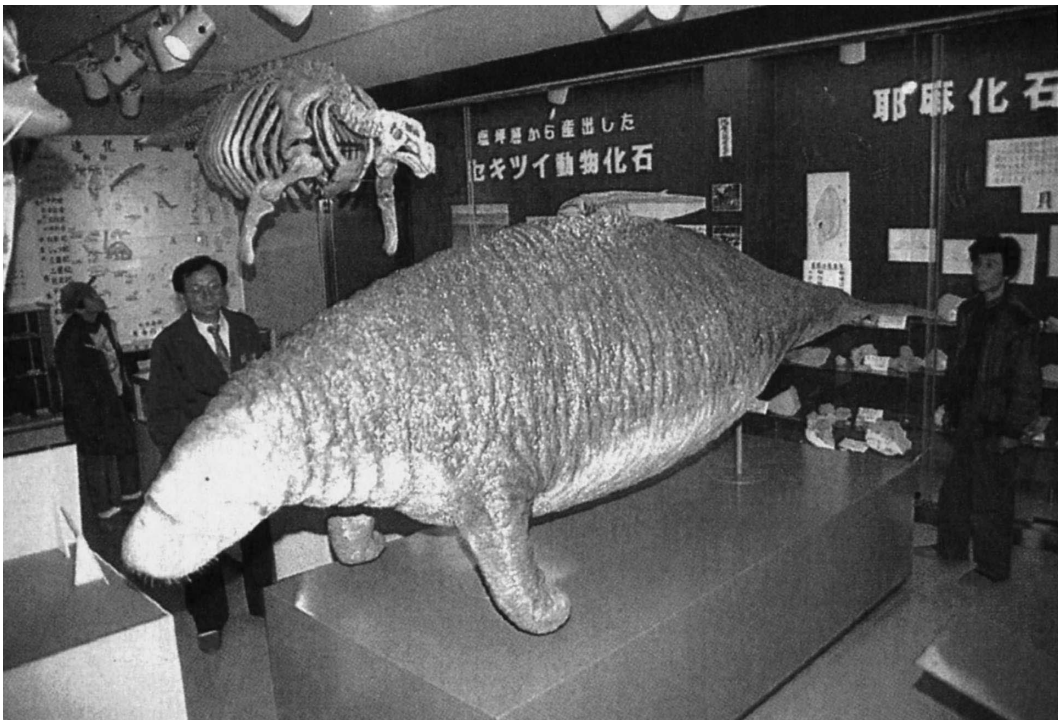
注

1) 『日本国語大辞典，第十五巻』（小学館，昭和 50 年）p. 546.
2) 『大辞典，第二十巻』（平凡社，昭和 11 年）p. 111.
3) 荒俣宏『世界大博物図鑑，第 5 巻［哺乳類］』（平凡社，1992 年）pp. 382-383.
4) 同前掲書。p. 383.
5) 『南方熊楠全集，第六巻，新聞随筆・未発表手稿』（平凡社，昭和 48 年）p. 310.
6) 荒俣宏『世界大博物図鑑，第 5 巻［哺乳類］』p. 378.
7) 能勢幸雄監修『魚の事典』（東京堂出版，1989 年）p. 204.
8) 同前掲書。p. 78.
9) 『世界大百科事典 13』（平凡社，1988 年）pp. 187-188.
10) 荒俣宏『世界大博物図鑑，第 5 巻［哺乳類］』p. 378.
11) 藤本治義，岡田弥一郎，三輪知雄編『博物辞典』（三省堂，昭和 13 年）p. 376.
12) 『世界大百科事典 27』（平凡社，1988 年）p. 136.
13) 日本古生物学会編『日本古生物学事典』（朝倉書店，1991 年）p. 36.
14) 荒俣宏『世界大博物図鑑，第 5 巻［哺乳類］』p. 387.
15) 高橋健二訳『アンデルセン童話集 1』（小学館，昭和 54 年）p. 128.
16) 同前掲書。p. 127.
17) 藤沢衛彦『日本伝説研究二』（六分館，昭和 6 年）pp. 40-42.
18) 麻生磯次，富士昭雄『対訳西鶴全集七，武道伝来記』（明治書院，昭和 53 年）p. 77.
19) 前野直彬訳『全釈漢文大系第 33 巻，山海経・列仙伝』（集英社，昭和 55 年）pp. 196-197.
20) 荒俣宏『世界大博物図鑑，第 2 巻［魚類］』（平凡社，1989 年）p. 467.
21) 荒俣宏『世界大博物図鑑，第 3 巻［両棲類］』（平凡社，1990 年）p. 21.
22) 同前掲書。p. 21.
23) 源順『倭名類聚鈔，巻十九』p. 2.
24) 碓井益雄『イモリと山椒魚の博物誌』（工作舎，1993 年）p. 204.
25) 安富和男『蟹の泡ふき―やさしい動物学』（北隆館，昭和 57 年）p. 35.
26) 内田恵太郎「人魚考」（『自然，第 15 巻，第 8 号』1960 年 8 月）p. 47.
27) 『太宰治全集，第六巻』（筑摩書房，1990 年）p. 315.
28) 本間義治「新人魚考―松森胤保の『両羽博物図譜』海魚部より―」（『新潟県生物教育研究会誌，第 24 号』1989 年）pp. 59-60.
29) 永積安明，島田勇雄校注『日本古典文学大系 84，古今著聞集』（岩波書店，昭和 41 年）pp. 533-534.
30) 荒俣宏『世界大博物図鑑，第 5 巻［哺乳類］』p. 391.
31) 「福島民報」（1999 年 5 月 26 日付）
32) 「朝日新聞」（2002 年 10 月 9 日付）

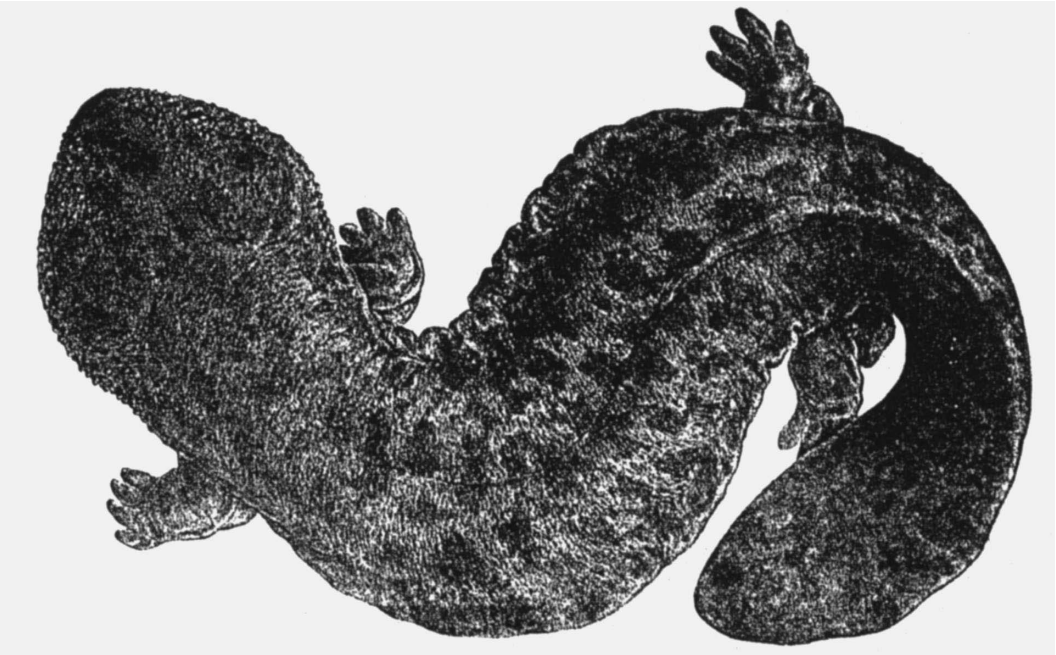


ジェシー・ホワイト『マナティ，海に暮らす』(講談社)

ジュゴン(「朝日新聞」1998年3月1日付)



ステラーカイギュウ（「福島民報」1997 年 3 月 19 日付）



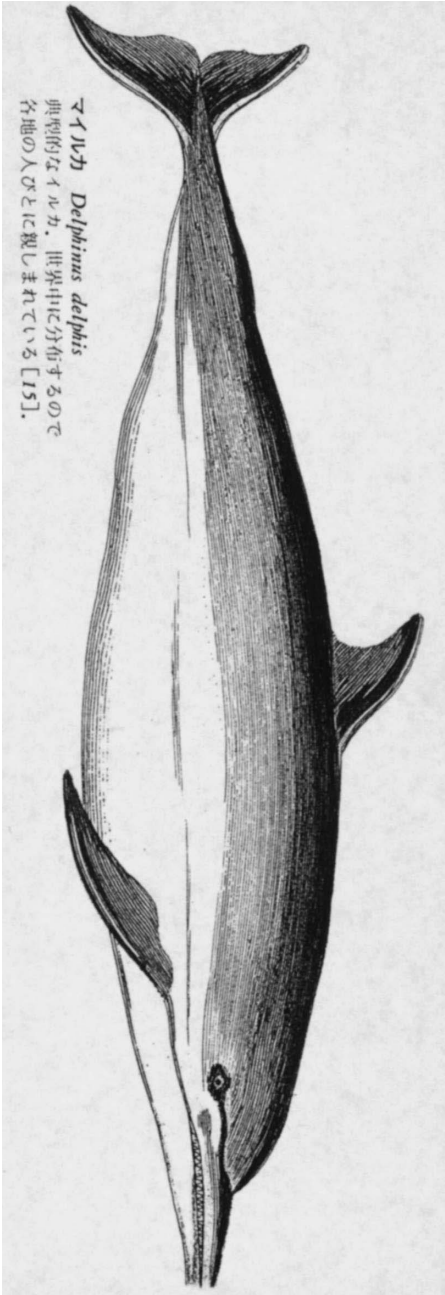
オオサンショウウオ（碓井益雄『イモリと山椒魚の博物誌』工作舎）

「竜宮城」から海岸に珍客？

佐賀の離島・神集島

玄界灘に浮かぶ佐賀県唐津市の離島・神集島（かしじじま）の海岸に5日、巨大な深海魚「リュウグウノツカイ」が打ち上げられた＝写真。散歩していた島の住職が見つけた。神集島小の野副法継教頭らが子供たちと巻き尺で計測。体長4・43メートル。最大幅は35センチ。体重は量れなかったが、島の漁師は「60キロ以上はあるな」。

リュウグウノツカイ（「朝日新聞」2002年2月6日付）



マイルカ　*Delphinus delphis*
典型的なイルカ．世界中に分布するので各地の人びとに親しまれている［15］．

マイルカ（荒俣宏『世界大博物図鑑，第5巻，哺乳類』平凡社）

人魚描いた木札を発見

秋田・洲崎遺跡

秋田県井川町の中世の港町遺跡「洲崎遺跡」から、「人魚」を描いたとみられる木札が見つかった、と同県埋蔵文化財センターが二十五日発表した。十三世紀後半ごろの絵とされる。人魚の絵としては最古のものではないかという。人魚の出現を凶兆と考え、祈願に使った可能性が高い、とみられている。

木札は長さ八十・六ｾﾝﾁ、幅十四・五ｾﾝﾁ、厚さ〇・五ｾﾝﾁの杉板。井戸跡から見つかった。墨書きで、僧侶の下に、二本の腕と二本の脚を持ち、人の顔をした魚が描かれている。全身にこのような斑点がある。

赤外線をあてて撮影した木の札の写真。下部に人魚が描かれている＝秋田県埋蔵文化財センターで

アザラシ（「朝日新聞」1999年5月26日付）

Das reelle Bild der „Meerfrau“: Über die eigentliche Gestalt von der „Nixe“ in der zivilen Überlieferung

KUZUMI Kazuo

Das Fabeltier „Meerfrau“, das hauptsächlich im Meer lebt und den Oberkörper des Menschen und den Unterkörper des Fisches hat, tritt von alters her auf den verschiedenen Literaturen auf. Besonders auf den dichterischen Werke wie „Den lille Havfrue“ von Andersen tritt die „Meerfrau“ am meisten auf, aber sie tritt auch auf dem chinesischen geographischen Buch „Sengaikyo（山海経）“ und auf dem ältesten japanischen geschichtlichen Buch „Nihon-shoki（日本書紀）“ usw. auf.

Was ist nun die „Meerfrau“ für ein Lebewesen？ Wie hat man das Fabeltier „Meerfrau“ in der langen menschlichen Geschichte geschaffen？ Was ist das Tier des Modells？

Nun wurden in diesem Aufsatz für die Erläuterung des reellen Bildes der „Meerfrau“ die folgenden Tiere hauptsächlich untersucht.

(1) Dugong, Stellerische Seekuh und Flussmanati（die Säugetiere）.
(2) Riesensalamander（die Amphibien）.
(3) Riemenfisch（die Fische）.
(4) Delphin und Seehund（die Säugetiere）.

Im allgemeinen hält man Dugong für das Modell der „Meerfrau“, aber Riemenfisch ist höchstwahrscheinlich das Modell der „Meerfrau“, wenn man auf Grund seiner Körperfigur und seiner Heimat vermutet.